

はじめに

史跡・名勝 飛鳥京跡苑池は、飛鳥時代に史跡 飛鳥宮跡の内郭の北西に隣接する地点につくられた庭園遺跡です。平成11年に橿原考古学研究所が実施した発掘調査で、はじめてその存在を明らかにしました。これまでの発掘調査で、南北2つの池（南池・北池）と渡堤、水路、掘立柱建物、掘立柱塀などで構成されることがわかっています。遺跡の範囲は、南北約280m、東西約100mにおよびます。

平成22年度からは、飛鳥京跡苑池の復元整備にむけ、継続的に発掘調査を実施しています。

今回の調査は、北池の規模と構造を明らかにすることが目的です。調査区は、北池全域を対象に設定しました。今年度は北池護岸全周の検出と北池南半の調査、来年度は北池北半の調査と、2カ年に分けて北池の調査を実施する計画です。

発掘調査の成果

1. 北池の平面形と規模

発掘調査の結果、北池護岸のほぼ全周を検出し、北池の平面形と規模、護岸の構造が判明しました。

平面形は、南北に長い方形で、北西部が隅丸状、北東隅部が東に張り出します。その規模は、東西が最大で約36m、南北が最大で約52m、面積約1,500㎡、深さ4m以上です。護岸の石積みには、自然石を用います。南岸（渡堤北岸）と北・東岸は、石材をほぼ垂直に積み、北西岸と西岸の大部分は、階段状になります。

2. 北池の護岸および池内付属施設の構造

南岸 南岸は、長さ約33m、高さ約1.9mです。下部の0.7～1.3m分は、7世紀後半の北池改修に伴う池内付属施設の造成によって埋没します。

東岸 東岸は、長さ約54mです。北端の約10mは、東岸の並びに対して東へ約3m張り出します。

西岸 西岸は、長さ約32m、高さ約1.8mです。南端から約22m分は、階段状となります。段は9段分で、南端部では下3段（高さ約0.7m）分が、池内付属施設の造成によって埋没します。その構造は、蹴上げに幅30～70cm大の石材を用い、長軸方向を横にして立て並べ、踏面に15～25cm大の石材を敷きます。蹴上げの高さは20cm前後、踏面の幅は40cm前後です。護岸から崩落し

た石材の検出状況から、本来はさらに数段高く積み重ねていたとみられます。

北西岸 北西岸は、長さ7m以上です。直線的に並べた石列を徐々に角度を変えながら隅丸状にします。西岸と同じく階段状ですが、その構造は異なります。踏面に10～30cm大の石材と25～50cm大の石材を用い、大きい石材を外側にして2列に敷きます。外側の石材の側面が、蹴上げを兼ねます。蹴上げの高さは15cm前後、踏面の幅は40cm前後です。詳細な調査は、来年度に実施する予定です。

池内付属施設 南・東・西岸の裾部に、盛土によって造成します。造成時期は、過去の調査成果から7世紀後半と考えられます。上面は、南東隅が最も高く、北と西に向かって傾斜します。南西隅付近では、上面に5～10cm大の石材を敷きます。幅は、南・東岸側とも2m前後です。池内付属施設の裾は、東西ともに湾曲しながら北へのびます。裾から斜面部は、南から西岸側では、20～30cm大の石材を並べ置きます。東岸側では、20～60cm大の石材が多量にありますが、本来は並べ置かれていた可能性が考えられます。

3. 北池と水路の取り付け部

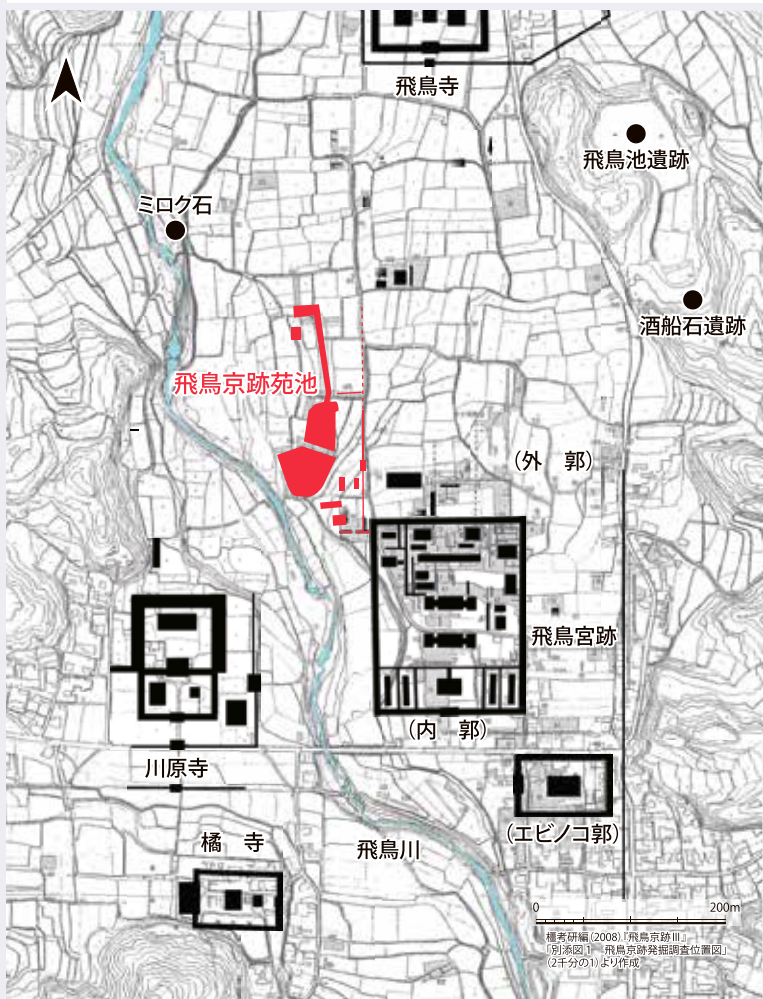
北池北岸と水路東護岸の取り付け部を検出しました。詳細な調査は、来年度に実施する予定です。

まとめ

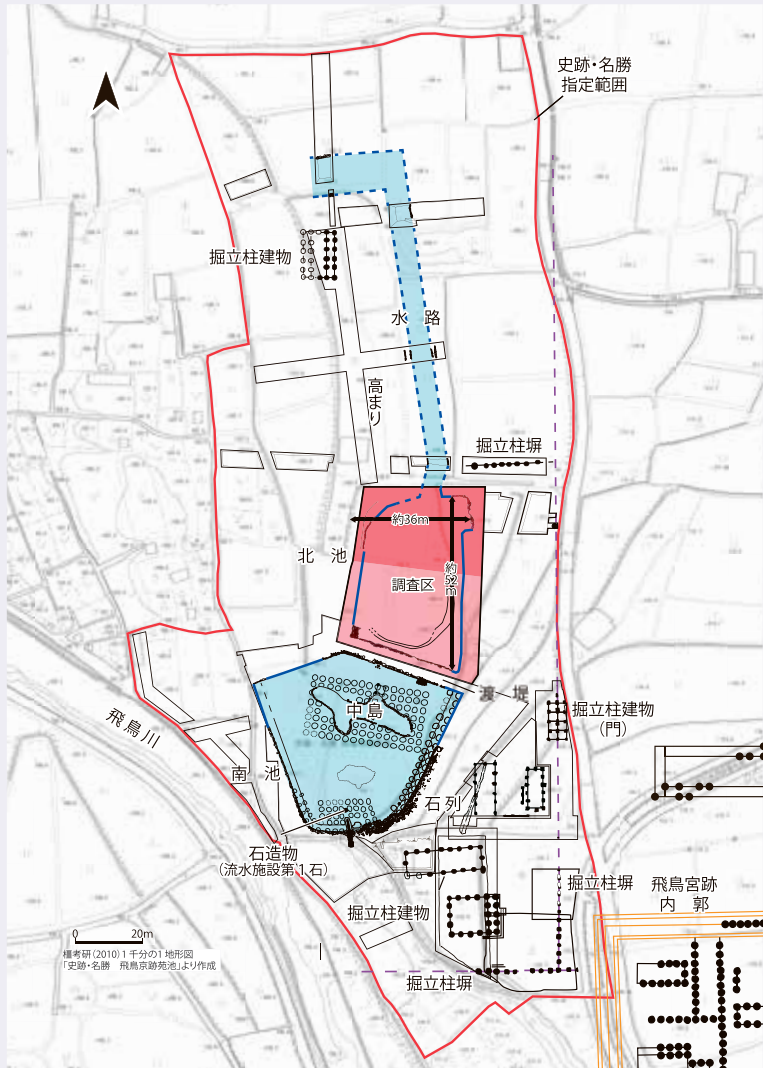
今回の調査で、北池の平面形と規模がほぼ確定しました。護岸は、西と北西岸が階段状であることがわかりました。過去の調査成果から、北東隅の北半も階段状で、蹴上げに石材を置き、踏面に敷石を施さない構造であることがわかっています。これら階段状の石積みは、場所によって構造が異なります。

全容が判明している南池と北池を比較すると、平面の面積は、南池が約2,200㎡であるのに対し、北池は約1,500㎡です。護岸の石積みは、南池がほぼ垂直の石積みのみであるのに対し、北池は階段状の石積みを多用しています。そのほかにも、平面形や池底の構造など、南池と北池では、その構造に多数の相違点が存在し、飛鳥京跡苑池が意匠のまったく異なるふたつの池によって構成されることが、より明確になりました。





飛鳥京跡苑池と周辺の遺跡



飛鳥京跡苑池の遺構配置と今回の調査区



北池全景垂直写真(上が北)



東岸南半と池内付属施設(北西から)



西岸(北東から)



西岸(部分)(東から)



池内付属施設と南岸(北東から)